法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

<特集随想>「外間ゼミ」創設期

内原，節子

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
51
(開始ページ / Start Page)
101
(終了ページ / End Page)
102
(発行年 / Year)
1995-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019801

「外間ゼミ」創設期

内原　節子

昭和二十三・四年生まれの私たちは、戦後第一次ベビーブームの頂点であって、生まれたときから生存競争を強いられていた世代であった。中学、高校は受験勉強の中に青春だとか友情などがあった様に思う。高校の時ある教師が「高校時代は灰色でも大学は違う。同じ目的を持った人の集まりで一緒に向上し競争もなく、教授とは温かく人間的なつき合いができる。」と言って大学にむけての受験勉強を励ましていた。

オリンピック、ベトナム戦争、成田闘争、水俣公害問題、中国文化大革命など社会は大きく揺れ、社会の矛盾に目覚めている友人も多くいたが、国語が好きで、本に夢中になっていた私には、早く高校を抜け出し、好きな本とすばらしい教授にめぐりあいたいという夢だけだった。法政の入学式は外堀の桜がちょうど舞い散るころで、花吹雪の中を母と歩きながらこんなに幸せでいいのかと思うほどであったと記憶している。

入学してすぐ行動したのは、法政大学沖縄県人会に入会の申し込みをした事だった。東京生まれ東京育ちの私でも両親が沖縄出身なのでもしかしたら入会を認めてくれるのではないかと、県人会のボックスに申し込みのメモを入れておいたら、すぐ歓迎の電話がかかって来た。先輩方は誰も思いやりが深く、東京に家がある私は両親をはじめ家族中が法政大学沖縄県人会に入った様だった。この県人会に入った事が外間ゼミに入るきっかけだった。

ただ漠然と「説話」あたりが学びたいと思って入学しただけに、法政の日文にどんな教授がいるのかまったく無知であった。県人会の先輩に、日文に外間守善という先生がいるから、県人会に誘う様にと言われ、その時初めて外間先生とお話をした。先輩の話では、外間先生にお会いした時、「食事はきちんと食べていますか」と聞かれたそうだ。先輩はいたく感激していた。この関係が私が高校時代に夢見た教授との人間関係なのかと思った。

それでも一、二年生の間は、外間先生の授業がなかったので、一度お話しただけで過ぎていってしまったが、三年になってゼミを選択する時、「外間ゼミ」が新設される事になり、降って湧いた様にゼミ選択で学生の中に情報が飛びかった。

「古代より以前の文学だそうだ」「沖縄の文学をやるらしい」などあって、文学の発生を学ぼうとしている人達が集まってきた。とくに四年生は、三年の時に入っていたゼミから何らかの問題意識をもって移って来ていた。その点、私の場合は沖縄二世でもあり、この学年では沖縄関係者は私しかいなく、県人会にも入っているから、新設された「外間ゼミ」に当然入らなくてはならないだろうと自分で思いこんで入

った様なものだった。

一九六九年、「外間ゼミ」の誕生は七十年安保、七十二年沖縄祖国復帰と社会が揺れ動く中での事だった。学園はバリケードで封鎖され、ゼミの教室が転々と変わり、記憶にあるのは神楽坂の暗い喫茶店での講義である。外間先生が体調を崩されて病床にあった時は、先生のお宅に呼ばれ枕元で卒論の指導を受けた事もあった。学生運動の波の中で先生に沖縄問題で詰め寄る学生もいたのでゼミは何となく本音でものが言えないような息詰まりさえ感じていた。沖縄文学という新しい分野の勉強で、現在の様に沖縄関係の本がすぐ手のとどく所にあったわけでもなく、先生の講義を聴かなければ雲をつかむようで決して独学ではできないのに、ゼミの雰囲気は先生のフィールドワークも聞けるような状態ではなく物足りなかった。これを補ってくれたのが、和敬寮で行われていた「おもろ研究会」であった。この研究会での外間先生は別人の様に見えた。ふるさと沖縄に帰った様で沖縄出身の年配方と共に「校本おもろさうし」を読み進め、ていねいな優しい言葉づかいで聞き取りをしながら一字一句漏らさずメモを取っていらっしゃった。ゼミからは三・四人が出席するくらいであったが、沖縄の方言も聞くことができ沖縄の生活も伝わって来た。さらに私たちにとって有意義だったのは、琉球大学から大学院を目指して外間先生の回りに集まって来た若い研究者のかたがたと知り合いになれた事だった。現在ではみなさんは沖縄の文化、文学を背負って、第一人者として活躍されている。学部生と大学院生では、と言うより、本土出身と沖縄出身では先生の思い入れがこんなにも違うのかとうらやましく思った事も事実である。和敬寮の帰りはおいしいケーキを食べに行ったりお寿司をごちそうになったり、先生の恋愛論まで聞かされて、これが私の求める大学生活だと満足したこともあった。

卒論は、自分の事だけで精一杯だったので他のゼミ生が何を提出したか分からないほどだった。個人指導はそれぞれが個々に受け、卒論面接のときも、益田勝実先生だったが外間先生が上手にホローして下さり無事終えることができた。

卒業後は縁あって八重山に嫁ぎ、石垣市立八重山博物館に勤務する事になったが、そのいきさつが、私が外間守善先生のゼミ出身と言う事で決まったようなものだったらしい。玻名城泰雄館長は来客の度に私が外間ゼミ出身である事を告げるので、外間先生の名前に傷がつかないよう、石垣市立図書館に移った現在も後ろに叱咤激励して下さる先生の気配を感じながら仕事をしている。

今振り返って見ると、あの頃先生から学ぶべき事はまだまだたくさんあったはずなのに時代の流れだったとはいえ、かえすがえすも口惜しく思う。

（うちはら　せつこ・旧姓　安谷屋・一九七一年卒）